

国文学科における『実践日本語表現法』 の実践報告

——プレゼンテーションの方法——

外 山 敦 子

はじめに

実践日本語表現法は、文学部共通の専門教育科目として2004年度から開講した1年生対象の必修科目である。学生に配布される『履修要覧』（2005年度版）実践日本語表現法の「授業概要」の項は、本科目の学習内容とその目標について次のように記す。

これから大学で学ぶ専門教育の基礎として、日本語における基本的な技能（書く・話す・読む・聞く・調べる）について学習する。日本語を有効に活用できる基礎的な知識を身につけること、身につけた知識をもとに実践的な能力を養成することを目標とする。

前期は「話し言葉と書き言葉の違い」「文の組み立て方」「分かりやすい文の書き方」「要旨の捉え方」「要約文の書き方」など、論理的な文章を書くための基礎を、後期はレポート作成の手順と方法をそれぞれ学習した上で、最終的には指定する課題に基づいてレポートを完成させる。

現在筆者が授業を担当している国文学科では、30名前後という比較的小規模のクラス編成を活かし、指定された課題をグループで調査し、まずはその成果を口頭発表して、その後各自がレポートを書くという手順で進めている。その意図は2点ある。ひとつは、レポートをプレゼンテーションと組み合わせることで、先の「授業概要」に記す「書く・話す・読む・聞く・調べる」のすべての要素を有機的に関連させた授業が可能になること。いまひとつは、はじめから個別作業をするよりも、グループ学習やプレゼンテーションをすることで学生相互が意見を交換し、その成果を踏まえてレポートを作成した方が、よりよ

い結果を期待できることである。

しかし、実践日本語表現法は開講2年目ということもあり、現在はより効果的な授業を目指して試行錯誤を繰り返しているただ中でもある。そこで、筆者の担当する国文学科における本年度の授業実践をここに報告し、工夫に満ちた優れた授業を実践なさっている方々よりのお教えを仰ぎたいと思う。なお、本稿は紙幅が限られていることもあり、年間30回の授業のうち、後期6回分に相当するプレゼンテーションの授業実践のみを報告する。加えてその報告は、「授業概要」に記した目標を達成するために、私がいかなる授業計画を立て、その結果がどうであったのかという点に限定し、意図・経過・分析・評価を除いたものであることを、あらかじめ断っておく。

1 授業計画

後期第1回の授業時に、次の課題を示した。

指定された日本文学作品について任意にテーマを設定し、その研究状況を整理して報告せよ。ただし、テーマは学説が分かれているものを選び、諸説の相違点を明らかにすること。

まずは本課題の調査結果についてグループごとにプレゼンテーションを行う旨を伝え、その際の条件や注意すべき事項について次の通り説明した。

- ・発表資料を必ず作成すること。
 - ・持ち時間は10分間とし、これを厳守すること。
 - ・諸説の相違を明らかにするために、「①いつ、②だれが、③どこで（書名・雑誌名）、④何を根拠に、⑤どのような説を発表したか」という点を踏まえて報告すること。
 - ・調査のために使用する文献は原則として専門書のみとし、高校生用の参考書（国語便覧等）や個人ホームページ等は使用しないこと。
 - ・調査のために使用する愛知淑徳大学図書館の蔵書は、借り出さないこと。
- プレゼンテーションに関わる6回分の授業計画は、次の通りである。

- ・第1回

授業計画説明

グループ及び担当する作品（作家）の決定

・第2回

発表資料作成の技術

論証の技術

班別指導①

・第3回

話し方の技術

班別指導②

・第4回～第6回

プレゼンテーション

第1回授業時は、授業計画について説明し2～3名で構成するグループを決定した（1クラス平均13班）。課題となる「日本文学作品」は、教員があらかじめ選んだ18の作品及び作家⁽¹⁾の中から、グループごとに選択させた。また、本時の最後に「担当する作品（作家）の基礎文献⁽²⁾」を大学図書館で探して奥付と共にコピーし、次回の授業に持参する。また、内容を精読して発表テーマ⁽³⁾を決める」という宿題を出した。

2 聞き手を意識した発表の技術

仮に本人がどんなにすばらしい成果を挙げたと確信していたとしても、他人に伝わり理解されなければその成果は存在しないことと同じである。そこで、発表の仕方ですれほど聞き手の理解に差がでるのかを検証し、伝わりやすい発表の技術について考える時間を設けた。

第2回授業では、「『落窪物語』の成立時期について」と題した2種類の発表資料〔資料1〕〔資料2〕を準備した。資料の完成レベルにいささか極端な差をつけ、「『落窪物語』の成立時期に関する諸説を整理し報告する」という架空の課題を設定して、教員が模擬発表を行った。まず〔資料1〕を使って発表し、理解できなかった箇所や根拠が不足していると思われる箇所を、挙手により指摘させた。次の意見はその一例である。

・いつ、どこで行われた発表の資料なのかが分からない。

- ・「『枕草子』に「落窪の少将」という言葉が登場する」と言うが、資料を見てもすぐにそれを探すことができなかった。
- ・三谷邦明氏の説が、いつ、どこで発表されたのかについての情報が記されていない。
- ・三谷邦明氏の説の根拠について十分な説明がない。
- ・資料に元号だけが並んでおり年代の前後関係が把握しにくい。

続いて、[資料2]を使って先刻と全く同じ内容の発表をした。学生には、[資料2]で工夫されている点について、挙手により指摘させた。次の意見はその一例である。

- ・いつ、どこで行われた発表なのかが記述してある。
- ・目次があると発表の道筋が分かるので、有効な方法だと思った。
- ・資料の随所に番号や傍線・記号・ページが付してあるので、資料のどこを見て話を聞けばよいのかが分かる。
- ・作品本文や事実の確認があるため、三谷邦明氏の説が論証に基づいたものであることが理解できた。
- ・各節ごとの重要な点が枠囲みでまとめられているので分かりやすい。

いずれも、聞き手の理解を得るために欠かせない技術である。

また、資料の作り方に関連して、他人の説や作品本文を引用する際のルールや書誌情報の示し方についてもあわせて整理した。その際、先週の宿題である基礎文献のコピーを利用し、引用の仕方や参考文献一覧の書き方を実際に練習してみた。最後に、「発表テーマに沿った文献を収集・精読して、発表内容を絞り込み、仮目次を作成する」という宿題を出し、本時を締めくくった。

第3回授業では、話し方の技術を取り上げた。新聞記事を利用し、「読んで理解できる文章」と「聞いて理解できる文章」との相違点に気づかせ、口述原稿を作成するための技術をまとめた。新聞記事の文章を口述原稿用の文章に改め、実際に読む練習も行ったが、紙幅の都合上詳細については省略する。

3 班別指導

第2回・第3回授業時は、最後の10分間を班別指導の時間に充てた。宿題の

提出と進行状況の確認が主だったが、「参考文献が探せない」「テーマが絞り込めない」など、各班の抱える問題点がそれぞれ異なるため、毎回時間が不足した。班別指導の時間を授業時間の中からいかに捻出していくかが、今後の課題である。

4 プレゼンテーション

第4回授業時から、1回につき4グループずつ計3回にわたってプレゼンテーションを行った。1グループの持ち時間は20分間、時間配分は次の通りとした。

- ①プレゼンテーション 10分間
- ②質疑応答 5分間
- ③教員による批評 5分間

発表グループは、準備した発表資料を授業開始前に教員及びクラス全員に配布する。プレゼンテーションは、原則として資料をもとに進めるが、必要に応じてホワイトボードの使用を許可した。

実際にどのようなプレゼンテーションが行われたのかについて、[資料3]「芥川龍之介「羅生門」の改編について」(2005年11月8日第3限 実施)を例に挙げながら述べることにする。

発表中は私がストップウォッチで時間を計った。本発表は8分23秒で、持ち時間を1分30秒近く下回っている。ちなみに、すべてのグループによる平均発表時間は9分38秒であった。これは、大半のグループが口述原稿を準備したり、事前にはリハーサルを行ったりするなどの本番に向けた準備が周到に行われた成果の表れであろう。

聞き手グループはプレゼンテーション終了後、挙手により内容に関する質問や発表そのものに対する意見を述べ、発表グループがこれに回答した。この時の意見とは、今後の学修につながる提言でなくては意味がないこと、またそれは自分自身に向けた発言でもあることを始めに理解させておく。次の意見は、本発表における聞き手グループからの質問・批判の一部である。

・資料3ページ以降で取り上げた『羅生門』の結びの変更に関する3つの説

の相違点が、よく理解できた。

- ・資料のレイアウトに統一性がなく見づらい。例えば、はじめは本文の引用箇所を使用していた枠囲みを、3ページの途中からは結論部分で使用している。その他、●や■の使い方も不統一である。

最後に、私が批判の整理・補足をして20分間を終える。本発表では、次の点について補足した。

- ・原稿を読み方が早い。自分がよいと思うスピードよりも「ゆっくり」を心がけると、持ち時間の10分間に限りなく近くなったはずである。
- ・資料の「三 (2)「羅生門」の結びの変更に関する諸説整理」は、内容による分類、あるいは年代による配列などを工夫した方が分かりやすい。
- ・資料の「参考文献」の書き方に不備が多いので注意する。

おわりに

全6回の授業終了後、私は学生に次の2つの作業を指示した。まず、グループ構成員が個別で「作業分担報告書」を提出することである。これはグループとしての成果だけでなく、グループ内における個人の貢献度も評価に加味することを目的としたものであったのだが、書式を特に定めなかったことで報告の内容に格差が生じ、貢献度が明確に数値化できなかった。今後改善すべきの課題のひとつとして挙げておきたい。

次に、無記名式の「プレゼンテーションの学修に関するアンケート」への協力である。本稿は、「はじめに」に記した通り、私の実践日本語表現法の授業方法の概要を紹介することが目的であるので、このアンケートの結果分析については割愛しなければならない。別稿にて報告しようと思う。

プレゼンテーションから約1ヶ月後の12月第2週に、全員が当初の予定通りレポートを提出した。レポートの書き方に関する授業実践や提出されたレポートは、稿を改めて紹介したい。

注

- (1) 参考文献が入手しやすい次の作品（作家）を選んだ。「万葉集」、「古今和歌集」、

『竹取物語』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『枕草子』、『徒然草』、『平家物語』、『奥の細道』、森鷗外、樋口一葉、与謝野晶子、夏目漱石、石川啄木、斎藤茂吉、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫。

(2) 各作品（作家）ごとにどのような項目が立てられているのかを知るのが目的なので、ここでは最低限の文献のみを指定した。『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、『日本古典文学大事典』（明治書院）、『日本古典文学研究史大事典』（勉誠社）、『別冊国文学 新・古典文学研究必携』（学燈社）、『日本近代文学大事典』（講談社）、『日本現代文学大事典』（明治書院）、『別冊国文学 新・現代文学研究必携』（学燈社）。

(3) 参考までに、学生たちの選んだ発表テーマの一部を以下に挙げる。

- ・『万葉集』の成立について
- ・『古今和歌集』の成立時期について
- ・『竹取物語』の作者について
- ・『伊勢物語』の作者について
- ・『伊勢物語』の書名について
- ・『源氏物語』の執筆時期について
- ・『枕草子』「枕」についての解釈
- ・『徒然草』の成立について
- ・『平家物語』の作者について
- ・『奥の細道』の発句説、連句説について
- ・『舞姫』の登場人物「エリス」のモデルについて
- ・『高瀬舟』「財産と云ふものの概念」と「ユウタナジイ（安楽死）」について
- ・『たけくらべ』の人名考
- ・『一握の砂』の「我を愛する歌」一二八番の解釈について
- ・『赤光』の「おひろ」のモデルについて
- ・芥川龍之介『羅生門』の改編について
- ・『ヴィヨンの妻』大谷像について
- ・『斜陽』と『斜陽日記』との関係

（文学部非常勤講師）

資料1

『落窪物語』の成立時期について

○○班
○○○
○○○
○○○

・『枕草子』

雨は、心もとなきものと思ひしみたればにや、かた時降るもいとにくくぞある。やむことなき事、おもしろかるべき事、尊うめでたかべい事も、雨だに降れば、言ふかひなくくちをしきに、何かその濡れてかこち来たらむが、めでたからむ。交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。

・一条天皇の即位と『枕草子』の成立直前 成立説(三谷邦明)

『落窪物語』に、天皇御代替りの行事が七月にあったと語られる。

花山天皇から一条天皇への御代替りの時期と一致。

資料2

実践日本語表現法 b (○○○先生) 発表資料

於○○○教室

『落窪物語』の成立時期について

二〇〇五年〇月〇日(〇) 第〇限 発表
○○班 学籍番号○○○○○○○○
一年○○○○組○○番 ○○○○
.....

■目次

一、『枕草子』に登場する『落窪物語』

二、成立時期に関する諸説整理

1 一条天皇の即位と『枕草子』の成立直前

2 寛和元年秋と寛和二年末

3

4

No.1

『枕草子』に登場する『落窪物語』

資料①『枕草子』第二七四段 「成信の中將は」 条

雨は、心もとなきものと思ひしみたればにや、かた時降るもいとにくそある。やむことなき事、おもしろかるべき事、尊うめでたかべい事も、雨だに降れば、言ふかひなくくちをしきた、何かその濡れてかこち来たらむが、めでたからむ。交野の少將もどきたる落窪の少將などはをがし。

(松尾聡ほか校注『新編日本古典文学全集 枕草子』小学館 一九九七年一月、四二七頁)

※『枕草子』の成立期 (一〇〇〇～一〇〇一) 以前に『落窪物語』が流布していたことは、ほぼ間違いない。

二、成立時期に関する諸説整理

1 一条天皇の即位(九八六年)と『枕草子』の成立直前(九九九年)

●三谷邦明『落窪物語解説』(三谷栄一ほか校注『日本古典文学全集 落窪物語』小学館 一九七二年八月資料②『落窪物語』巻三

かかるほどに、にはかに、帝、御心地、悩み重くて、おりたまひて、春宮位につかされたまひぬ。(中略)七月のうちには、おほやけのこと、いとあわたし。暇なきうちに、この御八講のことたゆみたまはず、八月二十一日にとなむ定めける。

(三谷栄一ほか校注『新編日本古典文学全集 落窪物語』小学館 二〇〇〇年九月、二五七頁)

《 中 略 》

※1 (三谷邦明説) のまとめ

『落窪物語』巻三では、天皇御代替りの行事が七月にあつたと語られる。

花山天皇から一条天皇への御代替り(六月三日、即位行事は翌七月)の時期と一致

← 実在の一条天皇をモデルしているのではないか

← 『落窪物語』の成立は一条天皇即位(九八六年)と『枕草子』の成立直前(九九九年)

《 中 略 》

■参考文献

三谷 邦明 『落窪物語解説』(三谷栄一ほか校注『日本古典文学全集 落窪物語』小学館 一九七二年八月)

原 國人 『落窪物語』の成立について』『國學院雑誌』第八一卷第七号 一九八〇年七月)

柿本 奨 『落窪物語』

(日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第一巻』岩波書店 一九八三年一〇月)

神野藤昭夫 『落窪物語』(藤井貞和編『別冊国文学 王朝物語必携』学燈社 一九八七年九月)

藤井 貞和 『落窪物語解説』(藤井貞和校注『新日本古典文学大系 落窪物語』岩波書店 一九八九年五月)

網谷 厚子 『落窪物語』(西沢正史ほか編『日本古典文学研究史大事典』勉誠社 一九九七年一月)

実践日本語表現法b (外山敦子先生) 発表資料

於731教室

芥川龍之介「羅生門」の改編について

二〇〇五年十一月八日(火) 第三限 発表

十一班 学籍番号

05

一年LJO組番

05

一年LJO組番

■ 目次

- 一、作品概要
- 二、「羅生門」の出来る経緯
- 三、「羅生門」の改編について

一、作品概要

(1) 基本的なデータ

初出：一九一五(大正五)年十一月、『帝国文学』

文体：旧字旧仮名

題材：『今昔物語集』巻二十九「羅城門」（羅城門、登上层見死人、盗人語第十八）（羅城門）上の層に登りて死々を見た。活々の語（第十八）

(2) あらすじ

「羅生門」あらすじ

平安末期 主家から暇を出されて生活難に苦しむ下人が、生きるためには盗人になるより仕方がないと思うが決心がつかぬ。たまたま羅生門上で死人の髪を抜く老婆を見て、一度は義憤に燃えるが、死人も生活の為に悪事をさんざんした女であり、老婆も生きるために死人の髪を抜いて鬘を作るのだと聞き、下人も決心して追い剥ぎとなり、老婆の衣類を剥ぎ取って姿を消す。

(芥川龍之介『地獄変・戯作三昧 他六編』 旺文社文庫 一九六九年七月一日)

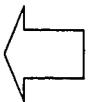
二、「羅生門」の出来る経緯

「羅生門」をむく前に、芥川は失恋を経験している。

失恋事件

「この年、龍之介は才色兼備の女性吉田弥生とめぐりあっている。(中略)その恋愛は、養家の人々の反対にあつて破れてしまう。養父母ばかりか、龍之介を心底から愛した母親がわりの伯母フクまでもが反対する中で、彼は弥生との結婚をあきらめる。それは彼の心に深い傷を残した。」

(山田国雄編『芥川龍之介・生誕百年、そして今』毎日新聞社 一九九二年五月一日・二十三頁)



失恋の後、芥川はその傷を癒すために様々なことを試みる。

傷心旅行

「失恋の痛みを癒すべく、龍之介は親友井川恭の故郷松江に旅をする。大正四(一九一五)年の夏の事である。同年十一月号の『帝國文学』に載った『羅生門』は、この旅の直後に書き上げたものであった。」

(山田国雄編『芥川龍之介・生誕百年、そして今』毎日新聞社 一九九二年五月一日・二十三頁)

官能の世界へ

「失恋直後、龍之介は官能に救いを求め、吉原や品川の遊郭に足を踏み入れる。」

(山田国雄編『芥川龍之介・生誕百年、そして今』毎日新聞社 一九九二年五月一日・二十四頁)

しかし、そのどれもが虚しいことだと解り、

彼はやがて文学にその心をぶつけ始める。

「情熱が建設的方向をとりはじめ、失恋事件は文学的エネルギーに昇華していく。『羅生門』はその第一の作品であった。」

(山田国雄編『芥川龍之介・生誕百年、そして今』毎日新聞社 一九九二年五月一日・二十四頁)

●失恋をきっかけとして「羅生門」は生まれた。

三、「羅生門」の改編について

(一) 結びの変更

芥川は、『鼻』収録の「羅生門」から、本文を改めている。

資料① 「羅生門」結びの改編

「下人は、既に、兩を言して、京都の町へ、強盜を急ぎつつあった。」

『帝國文学』(第二十一卷第十一号 一九一五年十一月一日) 掲載本文



「下人の行方は、誰も知らない」

新興文叢書第八篇『鼻』(春陽堂 一九一八年七月八日) 掲載本文

■この間、約三年の年月を隔っている。

■下人のその後が詳しく描かれていた結びが、抽象的なものになった。

何故芥川は「羅生門」の結びをこのように変更したのか？

(2) 「羅生門」の結びの変更に関する諸説整理 (A~C)

A. 芥川は下人の行方を読者一人一人の「読み」にゆだねた、とする説

●関口安義『芥川龍之介とその時代』(筑摩書房 一九九九年三月二〇日)より

「芸術の鑑賞は芸術家自身と鑑賞家の協力である。」

(芥川龍之介『俳諧の言葉』岩波書店・一九三二年八月十日・十八頁)

「作者だけでなく、読者の想像力があってこそ、作品が成り立つ。」

「羅生門」など過去の作品を再録するにあたって、

芥川は「読者の想像力」に作品を委ねてみようと考えた。

「羅生門」の結びの変更(具体的な結びから、抽象的な結びへ)

《 中 略 》

■ 参考文献

- 吉田精一 『近代文学注釈体系 芥川龍之介』（有精堂出版株式会社 一九六三年五月二〇日）
- 関口安義 『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房 一九九九年三月二〇日）
- 関口安義 『芥川龍之介』（岩波書店 一九九五年一〇月二〇日）
- 関口安義 『羅生門』を讀む』（三省堂 一九九二年一月二五日）
- 三好行雄 『芥川龍之介論』（筑摩書房 一九四〇年九月三〇日）
- 佐藤嗣男 『芥川龍之介とその文学の、地下水を探る』（おうふう 二〇〇二年三月二五日）
- 馬淵和夫ほか校注 『完訳 日本の古典』第三十二巻 今昔物語（小学館 一九八九年四月一日）
- 徳富蘆花 『謀叛論』（岩波書店）
- 芥川龍之介 『侏儒の言葉』（文藝春秋社 一九二七年十二月六日）
- 芥川龍之介 『芥川龍之介全集』第十巻（岩波書店 一九七七年七月十三日）

以上